

雨アリタリ、十四日午前六時ニハ此等ノ低氣壓ハ既ニ日本海ヲ横斷シテ九州北部、四國、本州西部ニ降雨アリ本邦各地ノ氣壓ハ七百五十四乃至七百六十一「ミリメートル」ニ下降シ、同日九州、本州、四國ノ各地ニ雷雨ヲ起コセリ。

八四 普通噴煙ト氣壓トノ關係 淺間山ノ如キハ平時ニアリテ白煙ヲ噴出ス、此ハ普通ノ狀態ニシテ噴煙ノ量甚ダ多キコトアルモ破裂ト稱スベキニハ非ザルナリ。普通噴煙ハ一日中ニテ氣壓ノ最低ナル二三時頃ニ増加スルモノナルガ如シ、又々天氣ノ變化シテ雨降ルノ前、即チ低氣壓來レル際ニモ噴煙盛ナルヲ常トス。淺間山觀測所ハ山頂ヨリ約二十七町ヲ降レル山ノ西西南側湯平ニアリ、同所ニ於ケル微動計觀測ニヨルニ明治四十二年乃至大正三年ノ淺間山ノ微小噴火ハ非常ニ夥ダシク、五月ヨリ十月迄ノ六ヶ月間ニ於テ、明治四十四年ニハ五百七十七回、明治四十五年、大正元年ニハ千百十一回、大正二年ニハ七百〇一回ヲ算セリ、然ルニ淺間山ニテ氣壓ガ顯著ナル最低示度ニアリタルトキハ此等ノ小噴火ガ夥多ナルコト無カリキ。要スルニ低氣壓ノ際ハ普通ノ噴煙盛ナレバ、山下ニ蒸汽瓦斯ノ積加ヲ來スコトナク從ツテ破裂ヲ發スルノ必要少ナカルベキナリ、大破裂ト前記セル如キ微小ノ噴出トハ、時ノ分布上ニ於テ必

ズシモ同様ナラザルベシ、第五章ニ論述スル噴火回数一年中ノ變化ト一太陰月中ノ變化ニ就キテハ、山麓遠近ノ地方ニテ變動ヲ感知セル程度以上ノ噴火ノミヲ取レリ。

第十五章 噴火性微動及ビ破裂ノ豫知

八五 火山活動ト微動トノ關係 明治四十三年有珠山噴火、同四十五年大島噴火等ニ際シ噴火孔附近ニテ微動計觀測ヲ施行セルニ一秒内外若シクハ〇・五秒内外ノ振動期ヲ有スル數種ノ微振動ガ連續存在スルヲ認メタリ、此ハ噴火ガ盛ナル時期ニノミ著ルシク發生スルモノニシテ「噴火性微動」ト稱スベキモノナリ、蓋シ強キ噴火前ニ當リテハ噴火性微動ノ現象最も盛ニシテ、其ノ結果有威ノ地震鳴動ヲ頻繁ニ生起スルニ至ルモノナルベシ。第三十四乃至第三十六圖ニ噴火性微動ノ記錄圖ヲ例示ス。

八六 有珠山微動觀測 明治四十三年有珠山ノ破裂ニ際シ、微動計觀測ヲ施行シ、頗ル有益ナル結果ヲ收ムルヲ得タリ。觀測ニ使用セル器械ハ簡單微動計ニシテ、東西及南北兩方向ノ水平動ヲ各々百倍ニ増大シテ、煤煙紙上ニ不斷自記スルノ裝置ナリ。七月卅一日ヨリ八月五日迄ハ此ノ微動計ヲ伊達村役場ノ内ニ据ヘ付ケ、觀測シタルガ、同役場ハ西紋鼈ニアリテ、有

珠山ノ中央點ヨリ南二十度東ニ當リテ二里ノ距離ニアリ。而シテ微動計記録ヲ驗スルニ夥多ノ地震アリ、其ノ日々ノ數ハ概略左如クナノリキ。

月 日	午前中ノ回数	午後申ノ回数	合計	每一時間平均回数
七月三十一日	—	八九	八九	七・五
八月一日	八四	七二	一五六	六・五
二日	七三	五六	一二九	五・四
三日	四三	三八	八一	三・四
四日	三一	三六	六七	二・八
五日	二六	三〇	五六	二・三

斯クノ如ク西紋籠ニ於テ七月三十一日正午ヨリ八月五日夜迄デニ微動計記象上ニ現ハレタル地震回数ハ約五百七十八回ニシテ、就中八月一日及二日ニハ合計二百八十五回ノ地震アリタルガ西紋籠警察分署ノ報告ニ依ルニ同兩日間ニハ十回ノ地震ヲ感ジタルノミナレバ微動計ハ普通ノ有感地震ノ數ヨリモ二十九倍即チ殆ンド三十倍多キ震動ヲ記録セルモノナリトス。但シ西紋籠ニテ有感、無感ノ地震ノ外ニハ特種ナル微動ノ存在アリシモ、極メテ微小ナリキ。

八月五日ヨリハ觀測所ノ位置ヲ變ジ、壯瞥村宇西湖畔ナル教育所ニ簡單微動計ヲ据ヘ付ケ同月十日迄デ觀測シタルガ西湖畔教育所ハ東丸山西麓ニ接スル九萬坪大噴火口ヨリ北八十三

度東ニ當リテ壹キロメートル(約九町)ノ距離ニアリ。此ノ場所ニ於ケル微動計記象ハ西紋籠ニ於ケルモノトハ異リ、地震ノ外ニ著ルシキ微動ヲ示シタリ。

壯瞥ニテ觀測セル微動ハ普通ノ脈動即チ振動期ガ約四秒乃至八秒ナル緩慢ノ動揺トハ異ナリテ、首トシテ振動期ガ平均〇・五二四秒(P_1 トス)ナル性質急激ナル一種ノ運動ニシテ、其ノ最大實動ハ東西及南北ノ兩方向ニ各々〇・一・ミリメートル以下ナリキ。此ノ他ニ緩慢ナル振動モ幾分カアリ、其ノ平均振動期ハ二・二秒(P_2 トス)、一・七秒(P_3 トス)ノコト最モ多ク、時トシテハ一・二秒(P_2 トス)ノコトモアリタリ。要スルニ P_1 ハ基本的振動ニシテ他ノ三種ハ各々其ノ二倍、三倍、四倍ニ相當スルコト左ノ如クナルベシ。

$$P_1 = 0.52 \text{ 秒}$$

$$P_2 = 2P_1 = 1.04 \text{ 秒}$$

$$P_3 = 3P_1 = 1.56 \text{ 秒}$$

$$P_4 = 4P_1 = 2.08 \text{ 秒}$$

壯瞥ニテ觀測セル地震動ノ振動期ハ〇・五二五秒トナリ、全ク微動ノ首要振動期 P_1 ト同一ナリ。蓋シ P_1 ナル振動期ヲ有スル振動ハ、此ノ場合ニ於テハ地震動ト性質原因ヲ同フセルモノニシテ、小ナル地震ヲ續發シテ微動現象ヲ呈スルニ外ナラザ

ルベシ。爰ニ最モ注意スベキ事項ハ前記微動ノ時分布ナリトス、即チ諸噴口ノ一個若シクハ數箇ヨリ盛ニ噴煙セルトキニ多少ノ微動ヲ示スヲ常トスレドモ、又々之レニ反シテ各噴口ガ全ク靜止シテ少シモ煙ヲ出ダサザリシトキニ盛ニ微動ヲ示セルコトアリ。要スルニ噴煙ガ普通ノ狀況ニアレバ、格別顯著ナル微動ノ出現ナキモ、一時全ク噴煙ヲ絶ツカ若クハ噴煙ノ量ガ極メテ減少スレバ却ツテ地下ニ壓力ノ積加ヲ來タシ、其ノ爲ニ小地震ヲ續發シテ盛ニ微動ヲ呈スルモノナルベシ。

此ノ結果ニ徴スルニ今回有珠山ノ破裂ニ際シ其ノ第一回爆發ノ前ハ微動ノ現象極メテ盛ナリシナラント想像セララル。

八七 淺間山觀測 淺間山西側湯之平ハ山頂大噴火孔中心ヨリ低キコト五百八十米ニシテ水平距離二千三百米ニアリ、同所ニ於ケル微動計觀測ニヨルニ噴火性微動ノ發生ハ稀ナルモ大正元年十月二日及大正二年八月十二日ノ如キハ此ノ現象ヲ呈シタリ。大正元年十月二日許多ノ地震及ビ火山性微動ノ發生アリテ淺間山噴火孔底ノ鎔岩ヲ著ルシク隆起セシメタリ、同日午前十一時廿二分四十秒ヨリ午後一時四分二十七秒ノ間ニ百五十四回ノ小噴火アリシガ爾後ハ小噴出接續シテ發起セル爲メ次ギノ一時五十九分二十秒間ハ噴火性微動ヲ形成セリ、午後三時〇五分四十五秒頃ヨリ再ビ順次ノ噴出ヲ區別シ得

ルニ至リ、其レヨリ次第ニ數ヲ減少シ午後八時四十四分五十二秒ヲ以テ終レリ、結局此ノ日ノ噴火ハ九時二十分間繼續シタリ十月二日ニ發セル小噴火ノ振動ト噴火性微動トハ左記スル如ク各三種類ニ分ツテ得ベク兩者ノ價値ハ其レ々相等シ。

小噴火微動 一・三二二 〇・九一 〇・四六
噴火性微動 一・二五 〇・九一 〇・四一

大正二年八月十二日ニハ午後七時四十五分〇八秒ト十一時二十分三十三秒トニ二回強盛ナル爆發アリシガ、此等ニ先キダチ同日午後一時二十六分四十秒ヨリ同四十分十五秒迄デ十三分三十五秒間極メテ規則正ダシキ小振動ヲ現出セリ、此ハ直接噴火若クハ地震ニ關セズシテ、一種ノ噴火性微動ノ類ナリシガ、最大動約〇・〇〇三「ミリメートル」ニシテ平均振動期ハ一・二秒ナリキ。

噴火性微動ノ振動期ハ強キ爆發、普通地震ニモ現ハル、モノニシテ、第二十九表ニ示ス如ク湯之平ニ於ケル各種振動ノ振動期平均價値ハ短カキ分ノミヲ舉グレバ

五・七^秒 二・二^秒 一・二七^秒 〇・八二^秒 〇・三九^秒
等五種アリ、就中噴火性微動ノ振動期ハ主トシテ一・二七秒、〇・八二秒、〇・三九秒ノ三種ニ屬ス。

第二十九表 淺間山湯之平微動計觀測 平均振動期

強キ爆發	—	五・三	二・二	一・三	〇・七三	〇・三七
強キ非爆發的噴火	—	—	一・九	一・二三	〇・七四	〇・三三
小噴火 (明治四十四年 大正元年)	—	—	—	一・三三	〇・七六	〇・三九
小噴火及噴火性微動 (大正元年十月二日)	—	—	—	一・二九	〇・九一	〇・四八
噴火性微動 (大正元年八月十二日)	—	—	—	一・二	—	—
普通地震	二六・四 ^秒	六・〇	二・二	—	〇・九五	〇・三八
平均	—	五・七	二・二	一・二七	〇・八五	〇・三九

八八 大島、三原山觀測 三原中央火丘麓及鏡端下ニ於ケル觀測ニヨルニ明治四十五年四月十二日、十四日ニハ噴火ハ殆んど全然靜止セルモ、地震動ハ依然トシテ衰ヘザリシハ、鎔岩堆積ノ爲メニ噴出口ガ一時閉塞セラレタルモ山底ノ噴火力ガ尙ホ勢力ヲ保持セルヲ示スモノナリ、又之ニ反シテ四月十日二十日及二十五日ニハ噴火甚シクシテ四月二、三日頃若クハ十日頃ノ最盛時期ト大差ナシト思ハル、程ナリシモ地ノ震動ハ四月十七、八日頃ニ比スルニ少シク小ナリシヲ以テ見レバ噴火活動力全體トシテハ當初ノ如クニハ強カラザリシヲ知ル

ベシ、要スルニ單ニ鎔岩流出ノ多少、若クハ轟鳴ノ強弱ノミヲ以テシテハ寧ロ皮相的ノ觀察ニ止マルベク、地ノ震動驗測ノ結果ヲ參考シテ始メテ噴火活動力全般ノ盛衰ヲト知シ得ベキナリ、鏡端下及元村吉谷神社内ニ於ケル微動計觀測ヲ比較スルニ元村ノ震動ハ鏡端下ノ震動ヨリ小ニシテ約三分一ニ相當スルガ如シ、然ルニ三原中央火丘麓ナル第一回觀測所ニ於ケルヨリモ鏡端下ニ於ケル方、却ツテ震動ガ幾分大ナルヲ以テ見レバ震動ノ起原點(震動起原個所ノ中心ト見做スベキ點)ハ鏡端下觀測點ニ最モ近カ、リシモノトセザル可ラズ、此ノ如キ事實ヨリ推スニ震動發生點ハ現今ノ三原中央噴火孔底ニ在ラズシテ、鏡端ヨリ西南約六七百「メートル」ノ距離、即チ三原噴孔ノ中心ヨリ西北約千六百「メートル」ヲ距テタル外輪山ノ西端ニ近キ個所ナラント想像セララル。

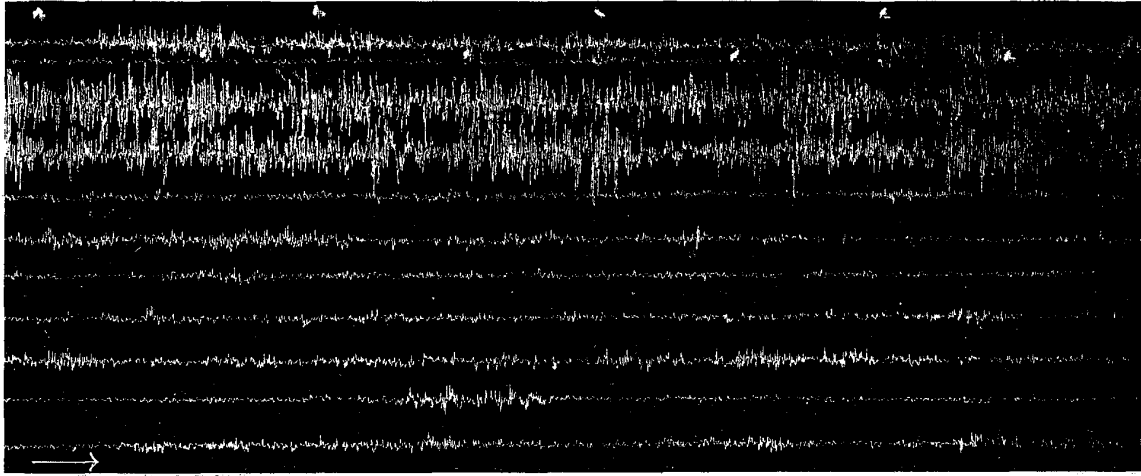
八九 噴火ノ豫知ニ就キテ 大地震ハ主トシテ地震脈ニ沿フテ發起スルモノナルモ同一ノ個所ヨリハ繰リ返ヘサズシテ地震脈中種々ナル點ヨリ順次ニ發生スルモノナレバ地震ノ豫知ハ複雑ナル問題ナリ、然ルニ一火山ノ噴火ハ其ノ都度噴出口ノ位置ヲ異ニスルコトアルモ兎ニ角、破裂ヲ同一火山ヨリ繰リ返ヘスモノナレバ噴火ノ豫知ハ地震ノ豫知ニ比スレバ頗ル簡單ナルベキノ筈ナリ。(第一)日本全國中ノ各火山相互ノ關係

噴火性微動觀測

壯警西湖畔ニテ觀測 噴火ノ山珠有年三十四治明 圖四十三第

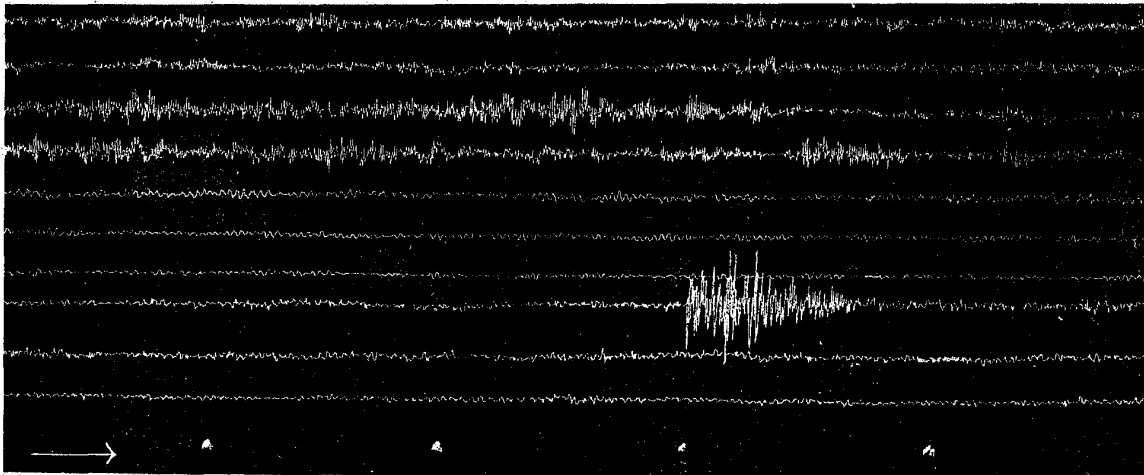
日七月八 倍十百ノ動實 動北南

北
—
南
(始)



日八月八 上同 圖五十三第

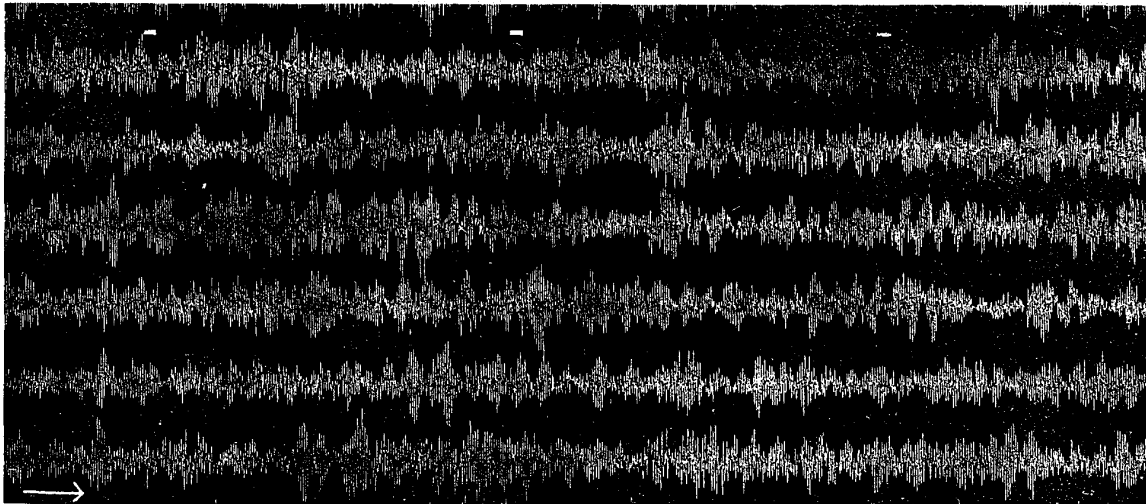
北
—
南
(始)



鏡端ニテ觀測 噴火ノ山原三島大年五十四治明 圖六十三第

日八十月四 倍百ノ動實

(噴火口ニ對シテハ縱動)
(始)



(リナ分一ハ離距ノ間次順ノ其テシニ記時ハ点白ノ邊下ハク若邊上圖各)

就中、一火山脈中、若クハ一火山地方ニ就キ相互ノ關係ヲ調査シ、(第二)各火山固有ノ習俗、即チ前兆諸現象、及ビ噴火ノ順序等歴史的研究ヲ遂ゲ、(第三)各火山ニアリテ噴火及ビ火山性地震、噴火性微動ノ驗測、竝ニ前兆タルベキ事項ノ調査ヲ施行スルニ於テハ噴火ヲ豫知スルコト必ズシモ不可能ニ非ザルコト有リトス。

又タ一火山ガ破裂スルコトアルベシトスレバ、岩塊、輕石、砂灰等降下スベキ區域ヲ概略推定スルハ敢テ難事ニ非ラズ、且ツ鎔岩流下ノ溪谷、泥流、噴火類レ押シ出シノ方面ヲ想像シ得ルコトモアルベシ。次ニ櫻島及ビ有珠山近年ノ噴火ニ關スル場合ヲ例示スベシ。

去ル明治四十年末ヨリ信飛國境ナル燒岳ノ破裂アリ、續キテ淺間、伊豆大島、櫻島等ノ大活動トナリタルニ際シ、溫泉岳ハ明治四十二年八月十六日午前五時ヨリ翌十七日午前五時迄ニ十七回ノ鳴動ヲ發シ、内二回ハ強キ地震動ヲ伴ヒ溫泉浴客ニ恐慌ヲ與ヘタルコトアリキ、爾後島原半島附近ヨリ局部的小震ヲ發セルコト稀ナラザレバ今後溫泉岳ガ活動セズトモ限ラザランガ、要スルニ有珠山、櫻島、溫泉岳ノ如キ火山ニアリテハ全く突然ニ磐梯山式ノ大爆裂ヲ發スルニ非ズシテ、先ヅ地震鳴動ヲ頻發シ初發ヨリ多少ノ時日間繼續シ漸次ニ勢力ヲ加フル

モノナルベク、且ツ火山性ノ地震ハ震動激甚ナルコト無ケレバ縱令溫泉岳ガ異狀ヲ示スコトアリトモ島原半島附近ノ住民ガ直チニ恐慌ヲ來タスニハ及バザルベシ。但シ常ニ溫泉岳ノ狀況ニ關シ注意ヲ怠ルベカラザルハ勿論ノ事ナリトス。

大正三年櫻島ノ噴火。櫻島ノ噴火ハ實ニ整然タル來歴ヲ示シタリ、古來本邦ノ歴史中ニ於テ噴火現象ノ最モ激烈ヲ極メタル時期ハ今日ヨリ百三十年内外前タル安永六年ヨリ天明ヲ經テ寛政四年ニ亘ル約十四ケ年半ノ間ニシテ、安永六年七月二十九日ヨリ伊豆國大島ノ破裂アリ、同八年十月一日(西曆千七百七十九年十一月八日)櫻島ノ噴火トナリ、翌安永九年ヨリ、伊豆國青ヶ島ノ噴火ヲ開始シ其ノ未ダ終ラザルニ天明三年ニ及ビテハ淺間山ノ活動トナリ、七月一日ヨリ八日ニ亘リテ最後ノ大變動ヲ生ジ、寛政四年ニハ肥前國島原溫泉嶽ノ破裂トナリ四月一日ニ及ビテ同嶽前山ノ大崩壞アリ泥水奔流シテ有明海ニ入り島原竝ニ肥後國ノ海邊ヲ蕩盡セリ、安永六年ヨリ百三十年ヲ距ツル明治四十年十二月ニ至リ信濃飛驒國境ノ燒岳ハ爆發ヲ始メ、翌四十一年ヨリハ淺間山モ活動ヲ開始シ、更ニ四十五年ニ及ビテハ伊豆國大島モ破裂ヲナシテ盛ニ鎔岩ヲ噴出セリ、即チ淺間山大島等ハ安永天明頃ト同ジク爰ニ近年ニ至リテ再ビ大噴火ノ時期ニ入レルモノナルガ燒岳ハ明治四

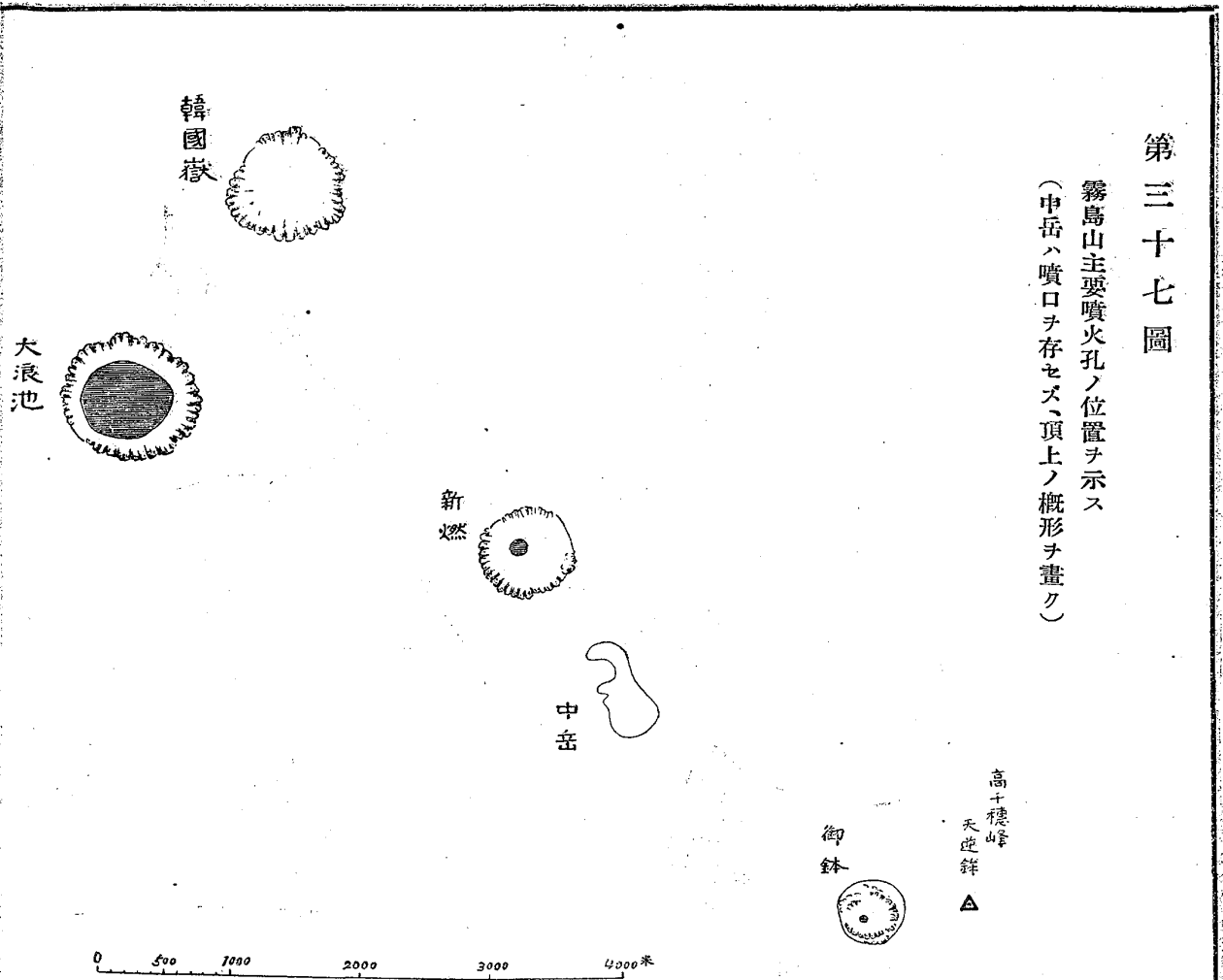
十四年夏期ニ於テ其ノ最盛時期ニ達シテ漸次鎮靜ニ歸シ、大島ハ大正二年春ニ至リテ一ト先ヅ全ク休止セリ、而シテ淺間山ハ同時活動期ノ終結ニ臨ミツ、アレバ、此等ノ富士火山帶ニ屬スル諸火山近時ノ活動ハ正ニ其ノ終リニ近ヅキタルモノニシテ、天明前後ノ歴史ヲ多少繰リ返スモノトスレバ次ギテ九州ニモ火山活動ノ發展ヲ見ルベキヲ豫想セル折柄、同年五月十九日ヨリ霧島山麓ノ加久藤、眞幸等ノ地方ニ地震ヲ頻繁ニ發生スルニ至リタレバ、余ハ翌六月直チニ書ヲ鹿兒島縣知事ニ寄セテ、鹿兒島縣下ハ從來地震頻繁ニシテ、且ツ火山ニモ富ミタル地方ナレバ火山性微動モ多キノミナラズ、霧島山活動ノ兆モ見ヘタル際ナルヲ以テ鹿兒島測候所ニ微動計ヲ据エ付ケ地動觀測ヲ開始センコトヲ冀望スルノ旨ヲ述ベ置キタリ、六月下旬ニハ鹿兒島半島伊集院地方ニモ強震ヲ發スルニ至リシガ、霧島山ハ遂ニ十一月八日ニ至リテ強ク爆發シ、十二月九日ニ第二回ノ破裂ヲナセル後、鹿兒島縣ヨリハ、同縣下ニ出張シテ霧島山ヲ調査センコトヲ照會セラレシガ、當時ハ主トシテ霧島山ノ活動ニ重キヲ置キタレバ、都合ニヨリ一月下旬ニ出張スベキヲ回答シ置キタリ、然ルニ大正三年一月八日ニハ霧島ガ第三回ノ強キ爆發ヲナセルアリ、鹿兒嶋ニ於テハ十一日午前三時ヨリ十二日朝六時迄ニ三百三十七回ノ地震ア

リタル趣ノ電報ヲ十二日朝十時頃ニ接手シタレバ、地下活動ノ大ナルニ驚キ、直チニ鹿兒島ニ出張スベキモ櫻島ノ状態ニ注意センコトヲ望ム旨ノ電報ヲ發セント思料セシ中ニ間モ無ク櫻島破裂ノ報ニ接スルニ至リ、遂ニ大變動ニ先キダテテ直接注意ヲ與フルノ機會ヲ逸シタルハ實ニ遺憾トスル所ナリ。明治四十三年有珠山ノ噴火。明治四十三年七月二十五日北海道有珠山ノ噴火ニ先ダテ、數日前ヨリ地震鳴動ヲ始メタレバ元ト警監學校生徒ニシテ當時ノ室蘭警察署長タリシ飯田警視ハ噴火ノ前兆ナリトシ英斷ヲ以テ附近ノ住民ニ退去ヲ命ジタルモ、住民中容易ニ應ゼザルモノアリシヲ以テ村會議員等ヲ集メテ、明治三十五年鳥島噴火ノ後ニ余ガ警監學校ニ於テナセル地震、噴火ニ關スル講演ノ筆記ヲ朗讀シ、退去ヲ強行命令的ニ遂行シタル結果一人ノ負傷者モ無キヲ得タリキ。本邦ノ主要活火山ニ火山觀測所ヲ設立シテ噴火現象ヲ詳細ニ調査センコトハ大ニ望マシキ所ナリ。

九〇 噴火、口變遷ノ例(淺間山) 淺間山(第三十八圖)ハ數次其ノ噴火口ヲ移動セルガ、其ノ移動ト共ニ活動勢力ヲ減ジタルガ如シ、黒斑山ト牙山ヲ連結セルモノハ第一次噴火口壁ノ西半ニシテ、前掛山ハ第二次噴火口ノ西方ノ殘部ナリ、而シテ現時ノ中央火丘タル淺間本山ハ即チ第三次ノ火口ナリトス、

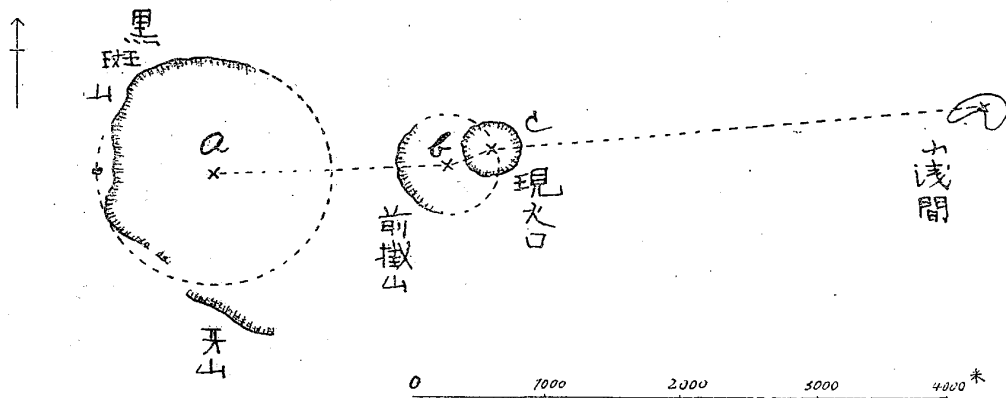
第三十七圖

霧島山主要噴火孔ノ位置ヲ示ス
 (中岳ハ噴口ヲ存セズ、頂上ノ概形ヲ畫ク)



第三十八圖

淺間山噴火孔ノ變遷ヲ示ス
 (a、b、c)ハ第一、第二、第三次火孔ノ中心
 點弧ハ前時噴火孔壁ノ推定位置



黒斑山ノ東北端ハ湯之平平地ノ東北限界ニ迄テ延長スルモ、其ノ走向ヲ見ルニ淺間本山火口中心ヨリ北六十八度西ニ當リ約千八百米ノ邊ヲ以テ頂線ノ終點トシ其レヨリ南東ニ屈曲シテ前掛山西北腹ニ向ヘルノ形勢ヲ示ス、故ニ牙山黒斑山等ノ第一次噴口壁ハ前掛山及ビ淺間中央火丘ヲ全然繞圍スル外輪山トハナラザルナリ。

又夕前掛山即チ第二次火口壁ノ殘部ガ規則正シキ弧形ヲ呈スルニヨリテ判スルニ其ノ東北壁ハ現時ノ淺間本山ノ壁ト相切リ合フモノニシテ現時ノ淺間火口ノ北縁ノ厚サガ薄クシテ急峻ナルモ幾分カハ此ノ中心移動ノ結果ナルベシ。

第一乃至第三次火口ノ大サハ概略次ノ如シ、

第一次火口 牙山、黒斑山 徑約一八〇〇メートル

第二次火口 前掛山 八〇〇

第三次火口(現時ノ淺間噴孔) 四五〇

第一乃至第三次火口ノ中心ト小淺間山トヲ連結スレバ西微南ヨリ東微北ニ走ル一線ヲ得、即チ一ノ火山性裂罅ヲ示スモノニシテ此ノ線ニ沿ヒ漸次火口ヲ移動セルナリ、火口間ノ概距離ハ次ノ如シ、

第一次、第二次火口中心間 メートル 一七五〇

第二次、第三次火口中心間 四〇〇

而シテ第一、第二、第三次火口ノ直徑ハ概略四ト二ト一ノ比ナレバ淺間山ノ噴火ハ火口移動ノ都度著ルシク其ノ勢力ヲ減少セルノミナラズ中心移動ノ距離モ前記ノ如ク四ト一トノ割ヲ以テ短縮シタルモノトス、故ニ淺間山今後ノ状態ヲ想像スルニ其ノ噴火力ハ益々減衰ヲ來タシ中央火口トシテハ或ハ現在ノ位置ヲ以テ最終トナスベキヤモ知ル可カラズ、但シ淺間山ハ大正三年以後全ク靜穩トナレルハ一時的現象ニシテ今後時々爆發ヲ發生スベキハ勿論ノコト、ス。